紹介

吉田幹生著『日本古代恋愛文学史』

桜井宏徳

吉田幹生氏の第一論文集である本書は、その帯に謳われるように「作品の微細な表現分析と巨視的な構想把握」に基づき、文学における最も枢要な問題の一つでありながら、近年では真正面から論じられることの少なくなった「恋愛」をテーマに掲げて、歌垣の時代から『源氏物語』以後までを見通そうとする、他に類を見ないユニークな文学史叙述の試みである。

本書は、中国大陸における隋王朝の誕生から起筆し、広く東アジア世界を視野に収めつつ、「中国文学と接することで倭の恋愛文学がどのような軌跡を経て「日本」の恋愛文学へと展開していったのかを明らかにしたいと思う」（「はじめに――日本古代恋愛文学史の構想」）と宣言するところから始まる。紙幅の都合で目次の細目をすべて掲げることは差し控えるが、以下、稿者の関心に即して、本書の成果のいくつかを雑駁ながら紹介してゆきたい。

第一篇「七・八世紀の恋愛文学」には、『萬葉集』『古事記』など、上代の文学を対象とする論稿群が収められている。なかでも、第二章「人麻呂歌集の相聞歌――正述心緒を中心に――」は、先行研究を手際よく整理し、その盲点を鮮やかに衝きながら、まずは一首の正確な訓みを定め、それを踏まえて、人麻呂歌集の歌々は個々の歌の次元を超えて「それらが歌集として編纂されたことによって、恋というものを自覚的に捉え返す道もまた大きく切り拓かれていくことになった」という説得的な推論を提示する好論である。

また、第四章「『古事記』における男と女――いろごのみ再考――」では、「男女の結び付きを通して支配・従属の関係を示す」という「いろごのみ」の概念によって『古事記』という作品を理解しようとすることの有効性に疑義が呈され、むしろ『古事記』の男女観は「去り行く女性の悲しみを癒し離別の苦しみを和らげようとする」ものであることが説かれる。従来やや融通無碍に用いられすぎてきた憾みのある「いろごのみ」の概念に文字通り「再考」を促す、研究史的にも意義深い論稿である。

続く第五章「『萬葉集』における「人妻」の位相」は、吉田氏の研究にとって一つの契機となった論文であることが「あとがき」に記されているが、ここでは冒頭の「『萬葉集』において、「人妻」はどのような言葉としてあるのか」（傍点稿者）という一文に注目したい。ここには、何よりも「言葉」に重きを置く吉田氏の方法が端的に示されている。文学における恋愛の研究はけっして容易ではなく、ともすれば過剰な感情移入や根拠の乏しい印象批評に陥りがちであるが、吉田氏の「恋愛文学史」がそうした凡庸な恋愛文学論とは一線を画して独往の達成を遂げているのは、あくまでも「言葉」を通じて文学に描かれた恋愛の諸相を解析しようとする姿勢が一貫して堅持されているからにほかならない。

第二篇「九・十世紀の恋愛文学」では、『竹取物語』『蜻蛉日記』

『うつほ物語』など、平安初期の文学が俎上にのぼせられている。第一章「〈あき〉の誕生――萬葉相聞歌から平安恋歌へ――」によって、恋愛文学史の奈良から平安への展開が、掛詞〈あき〉の表現史に即して丹念に辿られ、第一篇と第二篇との連接を円滑なものとしているが、最も特筆すべきは、第三章「恋愛文学の十世紀」である。

この第三章では、本書には専論が収められていない『伊勢物語』や『落窪物語』をも対象としながら、十世紀の恋愛文学をめぐる簡にして要を得た見取り図が描き出されており、その先には『源氏物語』の登場が見据えられている。吉田氏の強靭な思考力と、それに基づく「巨視的な構想把握」の魅力を存分に堪能できる、氏の学問のエッセンスが凝縮された章であるといえよう。

第三篇「恋愛文学としての『源氏物語』」では、『源氏物語』の「恋愛文学」としての性格が、夕顔・六条御息所・末摘花・紫の上といった女君たちと光源氏との関係を軸として、余すところなく論じ尽されている。『源氏物語』が「恋愛文学として」はほとんど論じられなくなっている昨今の研究状況に対する、吉田氏の静かな異議申し立てをそこに看取するのは、いささか深読みに過ぎようか。

吉田氏の『源氏物語』論は、第一篇・第二篇を通じて描き出されてきた「恋愛文学史」の集大成としての色彩が濃く、本書によってその重要性があらためて確認されたテーマである〈待つ女〉〈我が心〉などについても、女君たちの人物造型や心理描写に深く関わる問題として、再三にわたって詳細な検討が加えられている。

そして、光源氏の執着とそれに関わり合わざるをえない紫の上を描く第二部に吉田氏が見出した「男の執着と女の救済」という「新たな問題」をめぐる論述は、第六章「男の執着と女の救済――宇治十帖の世界――」における薫と大君・浮舟との関係の精緻な分析に結実しており、『源氏物語』が「恋する人間は救われるのか」という問いに答えることなく閉じられ、それが「中世の恋愛文学へと引き継がれていくべき課題」として残されたことが指摘されている。

このことについては、終章「十一世紀の恋愛文学――日本中世恋愛文学史へ――」でも再説されているが、「恋愛文学史」の古代は宇治十帖で確かに終焉を迎えている、という本書の見通しは、宇治十帖を平安後期物語や中世王朝物語への起点として位置づける通説的な理解に見直しを迫るものとして、貴重な問題提起となろう。

なお、本書の直後に発表された吉田氏の「恋愛――愛情か友情か文学アプローチ――」(成蹊大学文学部学会編『データで読む日本文化――高校生からの文学・社会学・メディア研究入門――』風間書房、二〇一五年)は、「古代」という枠組みを超えて、夏目漱石『こゝろ』をイントロダクションに、古代から現代に至る「恋愛文学史」の展開を俯瞰し、『古事記』から『北斗の拳』までを縦横無尽に論じてゆく、心愉しい論稿である。ぜひ本書と併読されたい。

(二〇一五年二月二十八日発行　A5判　四四一頁　八八〇〇円＋税　笠間書院)

(さくらい・ひろのり　本学非常勤講師)